

最後の仕事

昔、ある建設会社にまもなく退職を迎えようとする大工がいました。彼は大ベテランの職人の一人で、会社が社員のために持っていた寮にずっと住んでいました。

彼は、とてもうれしそうに社長のところに行き、2ヶ月後に退職することを伝え、彼の会社で何年ものあいだ働くことができたことに感謝したと言いました。

社長はとても悲しかったです。なぜならば、彼はとても優秀な大工であり、彼がいなくなると寂しくなるだろうとわかっていたからです。しかし、何年も働いたあとでようやく彼に退職の目が見えたのだと思いました※1。

「一つだけお願いがあります。私のために最後の家を好意でつくってください。場所はもう決まっています、基礎はできています。」と社長は彼に言いました。

大工は、若干嫌々ながら承知しましたが、2ヶ月だけのことであるし、普通それは、一軒の家を完成させるのに費やす時間であると考えました。社長に別れを告げて、さっそく仕事の準備を始めました。この2ヶ月がすぐに過ぎることを願い、そして、その後は...楽しく生きよう。

新たな家が建つ場所を見に行くと、とてもいいところにあることがわかりました。設計図を開いて、より早く作業が終わるように、いくつかのことを勝手に変更しました。豊富な経験があり、たとえ家が少しばかり小さくなったとしても、いったんできあがってしまえば、あまり気づかれることはないし、そのときには彼はもういなくなっているということにはわかっていました。

材料についても、それほど厳密ではありませんでした。より経済的な種類の材木を選びました。結局のところ、建設費用がより低くなるのだから、社長にとっても都合がいいと言いながら弁解していました。このように数日が過ぎました。

見込みよりも少し早く家が完成し、それを伝えるに社長のところへ行きました。

「どうもありがとう。なんて早いんだ。」と社長は彼に言いました。

「こんなに早くに終わるとは思っていませんでしたよ。私たちは、あなたのために送別会を開きたいんです。次の土曜日の予定です。」

送別会の日が来ました。大工は日曜日用のスーツ※2で身支度をして、送別会が開かれるレストランへ行きました。到着すると、みんなが立って拍手をしてくれました。彼は、こうして認められることにととても満足していました。

社長は静かにするように求め、何年にもおよぶ仕事と犠牲に対して大工に感謝を伝えるスピーチを始めました。そして、すべての社員が、そして誰よりも社長本人が、大工がいなくなることを寂しく思うと社長は言いました。そして、準備していた小さな箱を取り出し、みんなの前でそれを大工に渡しました。

「それを開けてください。退職のお祝いです。」と社長は彼に言いました。

彼は細心の注意を払って箱を開けると鍵がありました。「鍵...?」

「そうです。あなたが建てた最後の家の鍵です。あなたのものですよ。今から、あなたは自分の家に住むことができるんですよ。」と社長は言いました。

大工はあぜんとしました。瞬く間に、あの2ヶ月間の映像を見ました。

「設計図より小さな家にしてしまって、なんて馬鹿なんだ。より安い材木を選んで、なんて間抜けなんだ。設計図の家はあんなに素晴らしかったのに。私はなんて愚かなんだ。」

「あの家は私のためのものだったのに...」

※1 スペインでは通常、多くの人が仕事を引退することを楽しみにしています。

※2 スペインでは、一昔前、教会に行く日曜日や特別な日のためのよそいきのスーツがありました。